

さとりさまの

エロトラップ温泉旅館

satori in
sexaltrap
onsenryokan

~~18~~
For Adult Only

こんなな
ながったの
たのじが
に……♡



ある日、さとりは一枚のチケットと雑誌がデスクに置いてあることに気づく。

「さとり様、いつもお仕事ご苦労さまです。地霊殿に籠もりきりだと健康に悪いので、いま地底で話題の温泉のチケットをお贈りします。リフレッシュしてきてください。」

「ペット一同」



「ふふ、あの子達ったら」



「温泉か…たまにはうち以外に足を伸ばすのも良いかもしれないわね」

こうして、さとりは話題の温泉旅館へと足を伸ばすのだった。



『気持ちよかったね♥』
『また来ましょ』

あの子たち、あの温泉帰りかしら…
旅館への道すがら少女たちとすれ違う。



旅館に到着する。
受付を済まし、客室に荷を置いててか
ら話題の温泉へと向かうさとり。

温泉帰りらしい娘たち、肌ツヤが良かったわね…。
「身もココロもリフレッシュ！」か…。
ちょっと楽しみになってきたわ。



大浴場

「これは…」

広々とした大浴場には異様な光景が広がっていた。温泉で、人目もはばからず無数の男女が絡み合っている。

男女同士の者、女同士の者、複数で絡み合う者…みな発情し、一心にまぐわっていた。



身体の火照りを感じたさとりは、この湯のせいだと気がついた。

媚薬成分の入った桃色の湯が、湯気が、それを吸った人の理性をどんどん失わせていく！

「あっ♥ あっ♥」

「ちゅむ…ん…ちゅぶ…じゅっ…」

「はあ… はあ…」

「っ…出すぞ…！」

(うっ…心の声に当てられる…ここを出なきゃ)

大浴場に響く嬌声が耳から、快楽に溺れる心の声が脳から、さとりの内側を蝕んでいく…。

さとりは、桃色の湯気を吸わないようタオルで口を覆い、逃げるように大浴場を後にした。しきりに太ももをこすり合わせながら…。

ドクターフィッシュ

「はあ…はあ…はあ…」

大浴場から出たさとりは、通路の途中で看板が目にとまった。

「ドクターフィッシュ…?」

足湯のような浅い湯船に、にこり湯が張ってある。そっと足をつけるとツン、ツンと足先に刺激がありくすぐったい。

「〜ぞう〜温泉なのかしら…」

ぞうぞう

人魚の少女がさどりの足の間から顔を出す。


「ドクターフィッシュへようこそ。」

ここでは老廃物をデトックスしていっぱい気持ちよくなって行ってね♪」

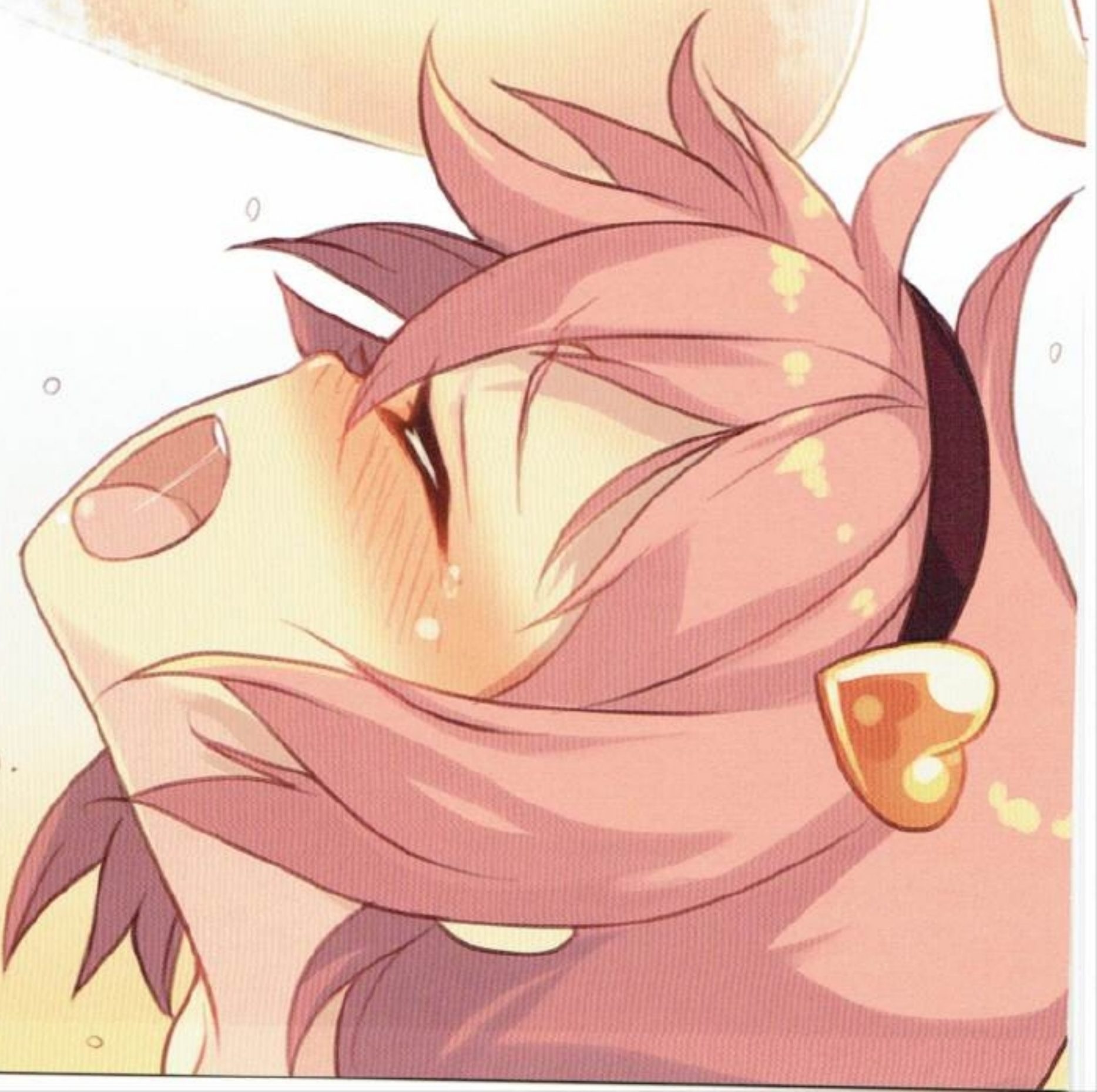
そういうと彼女は、さどりの脚にキスをして吸い上げていく。

「はむ。ちゅっ、れる…ちゅう…♥」

すねから膝へ登っていき、徐々にふとももに、そして脚の付け根へ…



「やだ…舐めちゃ…ひゃうっ♥」
がっちりと脚をつかまれ、くちゅ
くちゅと音を立ながら陰部を舐め
上げられるさとおり。
抵抗も虚しく上り詰めてしまっ…。



クリトリスへの刺激に逆らえず、さとりは快樂の波に飲
まれるしかなかった…。
「だめっ…もう…あっっ…♥♥」
嬌声を上げて震えるさとりに、わかさぎ姫はにっこりと
微笑んだ…。
「ハイ、おしまいっ」

スライム風呂

ドクターフィッシュから解放された後、さとりは温泉を巡っていた。あの舌使いの感触が、どうにも忘れられない…。

「次は何があるのかしら…」

その声は、不安の中にどこか期待の交じる響きがあった…。

翠緑色に淡く輝く温泉を見つけ

さっそく足をつけてみる。

湯は粘度が高く、ぬるぬるとさとりを包み込む。

「やだっ、なにこれ…」

輝く湯はさとりの肢体を這い上がり、ぬるぬるとうごめく。グリーンスライム風呂だ！

「スライム…？心が読めない…！」

ゆっくりと全身を飲み込むと、ぷるぷると

震えだし、さとりの敏感な場所を刺激し始める。

乳首、うなじ、脇の下、敏感なクリトリス、そして膣口へと侵入していく…。

「やああ…っ♥

こんなの…

気持ち悪い…のに…っ♥」

さとりは逃げることにすら忘れ、今まで体験したことのない快楽を受け入れる…。



「無理っ♥ もう…♥ だめ…っ」
「イっ！ ああああっ♥」

覆いかぶさるスライムに抵抗もできず、
さとりは翻られるままに何度も絶頂を迎えた…。
十分にさとりを満足させると、スライムは
ゆっくりと湯船に戻っていった…。

「はっ、はあ…スライムって…すごい…♥」





オイルマッサージ

さとりは夕食の後、ルームサービスのマッサージを注文した。

男の腕は良い。ベテランの手つきでさとの凝り固まった箇所を丹念にほぐしていく。初めは恥ずかしかったさとりも、徐々に身も心もリラックスしていった…。

「んっ…気持ちいい…っ」

ぬちゅ…ぬちゅ…

マッサージオイルの音が部屋に響き渡る。
男の掌が、指先が、さとの敏感な場所を何度も往復する。

「んっ…ふう…」

声を出さないよう必死にこらえた。
とろけるような優しい刺激に、徐々にさとりはマッサージとは違った心地よさを感じ始めていた…。



「んあ…♥」

乳首へのマッサージで思わず嬌声が漏れてしまう。
(もっ…このまま…)

だんだんと行為がエスカレートしていた矢先、
不意に男からマッサージの終了を告げられる。

「えっ、もう終わり…?」

身体の火照りは収まるどころか、より激しくなっ
ていく…。



さとりはうずきを

我慢できず、尻を突き上げて
男に懇願してしまった…。
その秘部は、既にぐっしよ
りと濡れ光っていた…。

「最後まで…して…」

「ちゅう、ちゅっ…」
「くっくっ…んっ…」
「ちゅる…くっあ…」

自分から男のモノを
求めて、くちづけ、
舐め、しゃぶる…。

自ら腰を下ろし、男性器を挿入してく…。

「んっ…。あ…♡ これ…♡
ずっと欲しかったの…♡」

みだらな腰使いで、快楽を貪る。
ただひたすらセックスに夢中になっていた…。

「くっ♡ 好き♡ おくっ、ゴリゴリっ♡」

「もっと…して、ほしいの♡」



「やあっ♡ あっ、あっ♡
またイクっ♡ いっちゃうっ！♡♡」

夢中で腰を打ち付けながら、さとりは何度も絶頂した…。

「んっ！…はあ…はあっ…はあっ…♡」

どくどくと、膣内をほとぼしる精液の温度を感じながら、
蕩けた瞳で熱い吐息を漏らした…。



「はあ…はあ…最高…♡」



内湯

「はぁ……やつちやった……」
「そんなつもりじゃなかったのに……」

内湯で汗を流しながら、さとりは先程までの淫靡な行為を思い出して、顔を真っ赤にした。

まだ、膣内に感触が残っている…。

「んっ…思い出したら、またしたくなってきた…。一回だけ…」

さとりは手を湯船に潜らせると、くちゅくちゅと陰部を刺激し始める…。

「はっ、んんっ…あっ♡ふっ…♡」

「いいの…♡あっ、くる…っ」

「やあっ、また、いく…っ♡」

背筋を反らせ、下腹部をびくびくと震わせる…。快樂の波が収まると、さとりは大きく息を吐いた。

「ふう…。なんてあさましい…。こんなところ、ペットたちには見せられないわね…」

のぼせる頭を冷ますように湯を上がり、すぐに床についた…。

チェックアウト

「まったく…。ペットたち、なんて旅館をチョイスするのよ…」

「でも、なんだかんだあったけど、身体の調子もすごく良いし、肌のハリもこんなに…」

「それに…その、すごく…気持ちよかったし…♡」



また来ようかしら…♡



「へー、こんなところに温泉あったんだ」

「見てあの人！すごい肌の艶」



「この温泉、評判いいらしいよ」

「身も心もほぐれてリフレッシュ！だって」

「ちょっと寄って行こうか♡」

END





あ と が き

ここまでお付き合いいただきありがとうございました。
皆村春樹です。

久しぶりのえっちブックです。相変わらずのさと子様。

ひと昔前、エロトラップダンジョンなるものが流行ってた
ような流行ってなかったような時がありまして、ダンジ
ョン以外にも使えるんじゃないかな?的な発想でこんな本が出来上
がりました。

煮詰めればもっと色々出てきそうなきがします。楽しんで
いただけたら幸いです。

奥 付

エロトラップ温泉旅館

発行日

2016 12 29 Comic Market 91

発行者

皆村春樹 / BLACKGATE

<http://blackgate.info>

印 刷

グラフィック

この本は東方 project の作品を原作とした
二次創作のファンブックです。

